園長だより　平成３０年３月号（20180316）

園長　平澤　正則

私の理想の母親像

　私の母親については尊敬もしているし大好きでもありますから，理想といえば理想といえるのかもしれませんが，毎日のように彼女のすべて（これは言い過ぎか？）を見ていると嫌な部分も見えるものだし，皆さんに“理想”などといえる気はしません。よく“理想の○○”などといいますから，難

しく考えなければいいのでしょうが，ここではその人の一部分でもテーマに対して特に秀でていると感じる部分をもち合わせている人のことを“理想”ということにします。そうしますと，本題である“私の理想の母親像”も述べやすくなります。

　では本題です。１月号にも書きました小学校入学前の児童をもつお母様方への講話の時にはいつも“星野富弘さんとそのお母さん”の話をします。星野さんのことについては知っている方もいると思いますが，簡単に紹介します。１９４６年群馬県に生まれた星野さんは群馬大学を出て中学校の体育教員となって間もなく，クラブ活動指導中に宙返りに失敗し脊椎を損傷し，それ以来首から下の自由を失いました。９年間の失意の入院生活を支えたのはお母さんでした。時には死んでしまいたいと考える息子を励まし続ける介護の日々のある日，星野さんはある少年の帽子へ記念のサインを試みます。サインペンを砕けるほど噛みしめながらやっと書けたのはポツンとついた小さな点だけでした。仕方なくお母さんに帽子を動かしてもらいやっとのことで「富」という字を書いたそうです。それ以来富弘さんは文字を書く努力を続け，やがて絵も描くようになりました。この紙の**裏面**の詩画は数多くの作品の中でも私が特に好きなものであり，冒頭で話しました若いお母さん方へ話す機会などではよく引用させていただいております。お母さんの「へぇっ！」に深い愛情を感じてしまいます。以下は私の勝手な解釈ですが…何を言うわけでもなくただ息子が描いた絵にじっと見入り，余計な評価もせず，ただただ『よく頑張って描いたね』とでも言うがごとくの母親の愛の言葉なのだと感じます。“無償の愛”には誰もが心を打たれますが，このお母さんほどの愛（努力ではなく愛なのだと思います）を捧げ続けることの困難をこの詩画を観ながら思うとき，私はいつも心が熱くなってしまうのです。星野さんのことを想う度，なんと強い人なのだろうと思うと同時に，適当な褒め言葉が思い浮かばないほどお母さんはなんと強くて素敵ですごい人なんだろうと思ってしまいます。こんな手の届きそうもない人のことを“理想”というのかなと感じます。

　多分，保護者の皆さんのお母さん方も様々な苦労の中で皆さんを育ててこられたのだろうと推測します。誰もがそうであるように，たった一つのわずかな（無限の宇宙から見れば）命のために，皆さんもまた自分のもっている最大限の愛をその一つ（娘や息子）に捧げているのだと思います。皆さんのそんな思いは必ずや園児それぞれの心に届き，彼らはそれを糧に健やかに成長することと信じます。

【裏面は　星野富弘さんが１９８４年に描いた“ヨメナとその詩”で，題名は不明です。】